

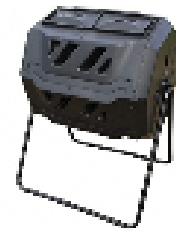
コンポストを活用した生ごみ堆肥化マニュアル
《山都町》

令和4年 12 月

1. コンポストとは？

コンポストとは、生ごみや落ち葉など家庭から出る有機物を微生物で発酵分解することでできる堆肥のことです。

生ごみや落ち葉などを入れる容器のことをコンポスターと呼びます。（右写真は回転式のコンポスター）



コンポスター

2. コンポストで生ごみを堆肥化するメリット

生ごみを放置すると臭いやコバエ発生などの原因になります。コンポストを活用して生ごみの堆肥化を図ることで、ごみ袋の節約や環境面にも配慮した無駄のない循環型の生活が実践できます。→ ゴミ出しも楽になります！

《メリット》

- ・キッチンに生ごみがなくなり清潔になる
- ・堆肥が無料で手に入る
- ・ごみの量が減らせる（ごみ袋の節約にもなる）
- ・環境に良い（CO2 削減につながる） 等

《デメリット》

- ・活用方法を守らないと悪臭や害虫発生のおそれがある
- ・廃棄物を細かく切り刻んだり、土をかき混ぜたりする手間が掛かる
- ・微生物が分解できない生ごみは容器（コンポスト）に投入できない
- ・堆肥が作られるまでに熟成期間が必要となる 等

3. 設置場所

- ・直接雨が当たる場所は避け、日当たりが良いところに設置する。
- ・暖かい場所の方が生ごみの分解が早く、堆肥化がうまく進む。

4. コンポストの基本的な使い方・作り方

(1) 下準備をする

- コンポストに生ごみを入れる前に、先に敷材（今回は竹チップを使用）を 20 リットル程度（袋の半分）投入します。
- 次に、生ごみを細かく切り、水気を切って、下準備をしておきます。生ごみを細かくしておくことで、分解・発酵がされやすくなります。水気が多すぎると、堆肥化せず腐敗してしまう原因となります。

- ・【ワンポイント】分解が遅い場合や臭いがする場合は、米のとぎ汁（米洗いの1番目の濃いとぎ汁）をコンポストに投入する。
- ・魚のハラワタなど腐りやすいものは、一度火を通す（または熱湯をかける）と良い。

(2) 生ごみをコンポストに入れる

- 土や敷材を入れたコンポストに（1）で下準備した生ごみを入れます。
- コンポストは、カラカラに乾燥していても水分が多くても上手く分解・発酵が進みません。手で触った時にしっとりしているくらいが目安です。
- コンポストの設置場所は、雨が当たらない場所を選んでください。

(3) 土や敷材をかぶせ全体をかき混ぜる

- （2）で生ごみを入れたら、必要に応じて土や敷材、発酵促進剤をかぶせます。
- 回転式コンポストを2～3回、回転させます。

※かき混ぜることで空気を取り込み、生ごみと土や敷材が混ぜ合わさって分解・発酵が進みやすくなります。

☆ 生ごみが出るたびに（1）から（3）の手順を繰り返します。

5. コンポストに入れて良いもの・ダメなもの

コンポストは微生物の力で生ごみを分解するため、微生物が分解できないものは投入できません。分解されやすいものや分解されにくいものがあり、入れてはいけないもの（分解できないもの）もあります。

入れて良いもの	分解されにくいもの	入れてはダメなもの
<ul style="list-style-type: none"> ・野菜、果物の残りカス ・刈った草（分解を促進するために細かくする） ・ご飯、パン、麺類 ・卵の殻 ・魚、肉類 ・茶葉 ・コーヒーかす（少量のみ） ・茶色い葉、小枝、木片 ・わらや干し草 ・新聞紙を細断処理したもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・生米 ・野菜の皮、芯など硬いもの（分解を促進するために細かくする） ・果物の種 ・魚や肉の骨（大きなものは分解されにくい） 	<ul style="list-style-type: none"> ・貝殻 ・たけのこやトウモロコシの皮 ・栗の皮 ・玉ねぎの皮 ・魚や肉の残骸 ・殺虫剤を使った植物・割り箸や爪楊枝 ・ラップ、ビニール袋 ・プラスチック、金属、ガラス ・油脂、グリース、オイル

6. コンポストで生ごみを堆肥化する際の注意点

(1) 水分量

生ごみの水分が多すぎるとカビの発生や腐敗の原因になるため、水分量には注意が必要です。水分が多いと土の中に隙間がなくなり、空気に触れにくくなることから、腐敗して嫌な臭いを発生しやすくなります。

生ごみは水気を切ってコンポストに入れてください。(分解する過程で多少水分が出ますが)コンポストの内部に水が溜まらないよう注意してください。コンポスト内部が水分でベトベトになると発酵が止まり、堆肥化が進まず腐敗しやすくなります。水分が多いと感じたら、早めに落ち葉や干し草、あるいは乾いた畑の土を入れて、よくかき回して(回転させて)ください。

(2) 直射日光

水分が多いことも問題ですが、直射日光の当たり過ぎで過乾燥になってしまうと、分解速度が遅くなってしまいますので、注意(適度な水分)が必要です。

(3) 虫の発生

生ごみはハエやアブ等の餌になり虫の大量発生にも繋がり、対処が難しくなります。虫の発生を防ぐために、必ず次のことを守ってください。

① 一度に大量の生ごみをコンポストに投入しないこと

※ 生ごみの投入量はあまり多くならないよう注意してください。敷材 20L に対して、生ごみ 15kg 程度(500g×30日)を目安としてください。

② 生ごみを入れたら必ずコンポストを回転*すること

※ 生ごみを投入した際は毎回必ず回転させ、分解促進のためには、毎日2~3回を目安に回転するよう心掛けてください。

③ コンポスト内に虫が発生しても化学薬品等の殺虫剤は使わないこと

※ 落ち葉や草などを入れるとミミズやワラジムシ、ダンゴムシ等が発生することがありますが、これらの虫は、土を植物の育成に適した状態にする能力があり、生ごみの分解を促進するので放置しておいても構いません。

(4) 臭い(悪臭)の発生

① 生ごみがうまく分解せず腐敗が進むと悪臭が強くなります。コンポスト内部の生ごみと敷材が十分に混ざり合うよう、頻繁に回転させるようにしてください。

※ たんぱく質の多い物を入れ過ぎると臭いが出ますが、数日で消えます。

② また、米ぬかや竹パウダー等の発酵促進剤を投入すると臭いが抑えられ、分解も進みやすくなります。

※ 落ち葉や干し草、炭の粉、もみ殻、炭なども悪臭を吸収してくれますが、一時的なものです。コンポストをよく回転するよう心がけるとともに、必要に応じて、コンポスト内の塊りを潰して、かき混ぜるよう心がけてください。

(5) その他

- ① 生ごみの1日の投入量はあまり多くならないよう注意してください。敷材 20L に対して、生ごみ 15kg 程度 (500g × 30日) を目安としてください。
- ② 【ワンポイント】 初めのうちは、敷材と生ごみをよく掻き混ぜる(回転させる)ことが、堆肥化を上手に進めるコツです。
- ③ よく混ぜ合わせる(回転させる)と、生ごみの分解が進みコンポスト内部の温度が 50~60 度にまで上昇します。そうなることで発酵が進み、コンポストの内容物が満杯になることや悪臭・虫などの発生を防ぐことができます。
- ④ 冬場は気温が低く土の温度が上がりにくいいため分解に時間がかかります。コンポストにタオルや毛布等を被せて内部の温度が上がるよう工夫しましょう。
- ⑤ 生ごみの量にもよりますが、状況によっては、半年以上生ごみの投入を続けることもできます。

予備知識

○コンポストできた堆肥の使い方

- ・投入を終えてから1か月未満の堆肥はまだ半生〔一次発酵〕の状態です。肥料として使用する際には、さらに2~3か月程度は繰り返し等により熟成〔二次発酵〕させてから使用してください。
- ・熟成したものでも、堆肥だけを植木鉢やプランターに入れて、草花の苗や野菜を植えるのは避けましょう。養分過多で、根や葉に影響が出る場合があります。